

豊かな心で死を迎える



講師の樋野興夫氏

がんと共に生きるためにはどうしたらいいのか。聴診器を対話に置き換え、薬ではなく『ことばの処方箋』を出す事。双方が苦痛にならない空間を提供し、空っぽの器に相手から水を入れもらうこと。『がんも身の内・個性』とし、『病気でも病人ではない』という勇気を抱きながら『天寿がん』を全うし、最期に死ぬという大事な仕事が残っている」と笑顔で淡々と語った。

人はどこで死ぬのか、病院か在宅か施設かと近年話題にされるが、樋野教授の話から「真の QOL (Quality of Life) 幸せは、どこで最期を過ごすかではなく、いかに豊かな心で死を迎えるかが大切であること」を痛感した。

福岡ホスピスの会の「がんカフェ」も5月から開催予定であるが、「ことばの処方箋」で語り合える日も近い。(4面お知らせ参照)

一年前、日本キリスト教団出版局の月刊誌「信徒の友」に「がん哲学外来・がんカフェ」という斬新な記事に巡り合えた。早速、著者の順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授・樋野興夫氏と連絡を取り、2月13日、福岡ホスピスの会主催の講演が実現した。

がん哲学外来・カフェを設立し、この7年間で3千人以上の方々とのふれ合いを通して語る樋野教授のぬくもりある話に、定員200席をはるかに超えた会場は、終始、癒しの空間に包まれた。

樋野教授は、「がん患者の生存率は5年と言われていたが、今は検診も広まり、10年の生存率になってきた。では、